

舟橋聖一

蜜蜂

中央公論社

蜜蜂

◎一九六九 検印廃止

定価六八〇円

昭和四十四年六月二十日 印刷
昭和四十四年六月三十日 発行

著 者 舟橋聖一

発行者 山越 豊

印刷 三陽 社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ一
電話(五六一)五九二一
振替東京三四

目

次

絲遊
羞恥
花と影
夜ふけの雨
八重椿
海の色
陶醉
微温
はつ雪
窓の菊

151 135 119 103 87 71 55 39 23 7

藤むらさき

黄^{たそ}昏^{がれ}

雨季

明けがらす

白てっせん

美男奴隸

夏瘦せ

湖岸

独白

あきさめ

167

183

200

216

232

247

264

280

296

310

薔薇くれない

衣ずれ

手術

短日

針と毒

もえ黄の風

326

342

358

373

388

404

蜜

蜂

窓の菊

その人の視線が、千勢子にむかって愛を語っていると気がついたのは、いつ頃からであつたらうか。

——麹町にある料理学校の門を出て、四谷見附のほうへ歩いてきた千勢子は、いつものところに、旗野が立って、待っている姿を見た。この冬、はじめての、オーバー・コートを着ている。千勢子は急ぎ足になった。

ほかにもその辺で、学校帰りの女生徒と待合せ、一緒に肩を並べて歩き出す男の数は少くなかったし、別にそれを咎める者もなかったが、千勢子と旗野の場合は、人の眼を惹かないわけにはいかなかった。先ず、齢があまりに、違ひすぎる。

彼はちょっと見は、五十歳そこそこだが、実際には六十を四つもすぎて居り、千勢子とは、四十近くの開きがある。ところが親類の小父さんと待合せたのだとは、誰にも思われないのである。たしかに老人と娘との出会いだが、それでいて、やはり愛人同士らしい艶々さを、否定することができないのである。

「ナフタリン臭いだらう。この外套——」

と旗野が言った。

「そんなことないわ」

「半年以上、しまつてあつたのだから、どうしても臭いよ」

「くよくよなさらないでも平気よ」

空はよく晴れて、チカチカと照りかがやく冬の日の中を、まだ秋の風がうすく吹いている今日は、同時に冬とも秋とも言えるようなニュアンスに富んでいた。

「今日のお料理は？」

と旗野が訊く。

「タン・シチューの煮込み方……お昼にみんな戴いちゃつた。中華のときは、残つたのを持って帰る人が多いけれど、タンは誰も残さなかつたわ」

「タンか。ぼくの好物だ」

齒のせいだろうと、千勢子は思ったが、黙っていた。若い男なら、タンでは物足りない。少々硬くても、厚切のサーロイン・ステーキを好むにきまつている。

——二人はいつか、外堀沿いに市ヶ谷見附のほうへ降りて行く一方通行の路へはいっていた。

「昨日の手紙、またパパに見付かつちやいましたの」

「そうか。うまくないな」

「そうでしょう。だから、あまりしげしげでないようにつてお願いしてあるのに……」

「パパ、何んて？」

「とんとラヴレターやおへんかって」

千勢子の父は、京都富小路の商家の出なので、時々、京都弁とも大阪弁ともつかぬ訛がまじる。そのパパは、五十六歳だから、旗野よりも若いのである。

もっとも、並べてみたら、容貌はどっちが老人か、すぐにはわからない。

二人が、国電市ヶ谷駅前の横断歩道を横切ろうとしたとき、千勢子は誰かに見られているような気がした。と言って、振り返って、誰であるかをたしかめる余裕はなかった。青信号はそろそろ、橙色に変わろうとしている。早く向う側の人道へ上ってしまわなければならぬのである。

第一、見られてあまりいい恰好ではなかった。旗野が千勢子の手を引っぱっているのではなく、女のほうが、男を庇うようにして、外套の肩を押していた。それでもどうか、橙色になったところで、二人は歩道を通りすぎた。

そして旗野が肩で吐息をしている間に、彼女が振り返って見たときには、駅前の人々は、さっきとはすっかり変っていた。改札口へ吸われてしまったのもあれば、タクシーに乗りこんだのもいるだろう。

然し千勢子は思った。

群り合う人たちの間から、チラッと二人を見たのは、富

原ではなかったかと。むろん、確認したというわけではない。錯覚かも知れない。二年ほど前の或る日、千勢子は富原と、ここで待合せしたことがある。富原は千勢子が中退したE大文学部のクラスメートであった。

「こんどはほかの道にしましょうね。市ヶ谷は危いわ。一日中ラッシュみたい」

と、千勢子は言った。

「べつにここを通らなければならぬってわけではないのだから……」

「いくつものいくつも、通りはあるのに、一度歩いた道へ、足つてもものは、向いちゃうのねえ」

——一口坂いぐちさかから、靖国神社まで、二人は少し大胆になって、手をつなぎ合ったまま、ゆるい勾配をのぼっていった。

「パパの仰有る通り、ラヴレターにはちがいないがね」と、旗野はさっきの話にもどした。

「とすると、パパが怒るのも、ムリないでしょう」「ぼくの齢を知っていらっしゃるのか」

「そんな……四十も違うってことは、知りませんよ」「四十じゃない。三十八だろう」

彼は訂正方を申入れる。

「一番正確に言うと、三十九よ」

「三十九と四十とでは、感じがまるで違うんじゃないか」「同じようなものだと思うけれど、あなたが三十九のほう

がいいと仰有るなら、これからはそう言いましょうね。でも三十八では、完全にサバを読んだことになるわ」

「三十八だと思つと、ぼくは大部分案になるがね」

二人の足の前にとりどころ銀杏が散っているのは、神社の境内に近いことを意味していた。

石の鳥居をくぐつた二人は、大村益次郎の銅像の下を回つて、砂利道を歩いた。

銀杏が散っている。

「今年最後の銀杏だな——」

と、旗野が言つた。並木の中には、あらかた散り果つたのもあれば、散り残つてまっ黄に黄ばんでいるものもある。その背景の西の空まで、油絵具のカドミウム・イエローをべったり塗つたように染まっている。

鳥飛んで鳥の如し、と言うが、銀杏は散り散らずして、はじめて銀杏に似たりか、と彼は思った。

砂利道のつきるところに、無料休憩所があった。千勢子が先に腰かけた。それから旗野も同じ方向に並んで腰をおろす。丁度、弁当でも使うのに都合のいい細長い卓^{ベンチ}がある。銀杏はそこまで、散りながら舞い、舞いながらころ、ころがってきた。

「昔、よく来たことがあるので、やはり、なつかしいな」
「昔っていつ頃のこと？」

「子供の時分さ——そうだな。約半世紀前かな」

「あら、いやだ」

「半世紀なんて言うのと、興ざめかね」

「そんなことはないわ。お詣りにいらっしゃつたの」

「主に見世物を見に来た。春と秋の例大祭には、たくさん小屋がかかつて、ろくろ首の女や二頭一身や人頭魚身の見世物があった。それを見ると、当分夜中にうなされるのに、年に二回のお祭がくると、やはり見ずにはいられないのさ」

「ろくろ首なんて、ほんとにあったの」

「なに、プリズムの仕掛けで、そう見えるらしいんだ——」

「いやらしい」

——九段坂は人ごみで、電車が止まる騒ぎだったから、旗野は飯田町駅と市ヶ谷駅との中間にあった牛込駅で、院線を降り、先に遊就館へ入ってから、小屋を漁つて見て歩いた。遊就館には、旅順口の戦争に取材したパノラマがあった。

それから十五年程経って、旗野はこの境内へはいり、今腰かけているあたりのベンチに掛けたことが一度だけあった。そして、その次は、もう戦時下で、この附近は、強い軍国主義に彩られていた。彼は三舍を避けて、千鳥が淵を望む散歩道へ場所を移した。

——胴長の観光バスが三台もつづいてはいつてきて、そ

の横ッ腹から、満員の客を吐き出した。

「では、手紙を出すのはよそう」

と、旗野は言った。千勢子は、舞いながら散ってくる銀杏のト葉を、指先で摘まんで焦茶色の卓の上へ置いた。それで、強い黄色がいっそう浮き出して見えた。摘まんだ指先まで、黄色に染まるのではないかと思われた。

「怒ったの」

「……たしかにパパを怒らせたのは、得策ではないな」

「でも、こうして散歩したり、話したりするだけでは、先生は物足りないんでしょ」

千勢子は、旗野のことをあなたと言うこともあれば、先生と呼ぶこともあった。

「しかし、君をぼくのものにするわけにはいかないのだ……さっきから問題になっているように、三十九も齢が違っているんではな」

「あたし、心から先生を尊敬していますわ」

「何遍も聞いたよ。しかし愛しているとは言わない。ぼくもそれは求めない。こんな男女関係は珍しいかもしれないが、あってもいいものだと思う。と言うより、ぼくが十年も若かったら、むしろ千勢子に結婚を申込んでいる」

「ほんと？ 十年若けりゃ、あたしみたいな女でなくたって、誰とだって結婚できたでしょうに」

「何を言うんだ。ぼくの相手は千勢子でなければならぬ」

んだ」

彼を愛していると言って欲しいなら、いくらでも言っておけるのに、と千勢子は思った。が、十年若かったら、千勢子は彼に応じたであらうか。いや、彼女が応じると言うより、千勢子の両親が目をつぶってくれたかも知れない。もっとも、父が六十四になった場合を考えると、旗野より遙かに老人であるだろう。その点、旗野は普通の男に較べてだいぶトクをしている。が、若く見えたからと言って、いざ結婚するとなれば、齢の開きがものを言い、途端に説得力がなくなってしまう。

バスから降りた客が、その休憩所で三々伍々、弁当をつかい出したので、千勢子は立上り、

「おみくじでもひいて来ようかしら」

と言った。

「ここにはおみくじはない」

「何があるの」

「お守りはあるだろう」

彼女は歩き出した。旗野も蹠いて行く。第二鳥居の次に神門をくぐると、右側に「神札授与所」があった。肌守りと交通安全のお札だが、千勢子はキンランの袋に入った肌守りを買った。

そこから少し離れて待っている旗野に、

「先生、しばらくでした」

と、声をかける者があった。今のバスから降りた団体客の一人だが、昔、E大学の「詩の講演会」で、壇上の旗野に質問し、それ以来ときどき原稿を見てもらいに來た男である。その後六、七年、会っていないかった。

肌守りを買った千勢子は、それを帶の間にしまいながら、「今のんだアレ」

「学生時分は抽象的な詩を書いていたが、地方の中学校の先生になってからは、志を棄ててしまった。名前も忘れた。顔だけは覚えている」

抽象的と言うより、少しアテコミの強すぎる詩で、まず大成の見込みはなかった。旗野とE大学の関係は、二年おきぐらいに学友会の詩歌研究会にたのまれて、詩の話をして行ったことがあるからである。

千勢子と知り合ったのもそのためだ。それまで千勢子は室生犀星や堀辰雄に凝っていたが、旗野に会ってからは、手の平を返すように彼に集中したのである。

しかし、旗野も詩人としては完成しなかった。それより、西行法師や源実朝の生涯を書いた伝記がよく売れ、L大学の文学部や、東京から一時間ほど電車で揺られて行く私立の音楽学校にも、詩歌の講座を持っていた。

千勢子が拝殿の前でお詣りをする間、旗野はブラブラしていた。

この齡になって、彼は千勢子にぞっこん惚れてしまった

のである。無理とは重々わかっている。千勢子は息子の義太郎より若いどころか、嫁の梅子より若いのである。

——二、三年前までは、妻を亡くした旗野に再婚をすすめる話もあったが、その多くは十ばかり若い五十五、六の女で、中で一番若いのも四十八の塩見和子であった。そういう婆さんは、とうに夫に別れ、女手一つで育てた息子や娘も片付いて暇が多くなったから、老人の世話でも見ようかという料簡が主である。そんな婆さんなら、皆も彼の後妻として認める氣である。しかし、旗野はまっぴらご免だ。

千勢子が戻ってきた。

「前から一度お詣りしようと思っていたんで、氣が済んだわ。先生は無神論なの」

「はてね」

返事を濁した。

「それとも、オールド・リベラリスト」

「どっちでもいいさ」

「そろそろ帰りましょうか」

「門限かね」

「そんなものはありませんよ」

「しかし、パパはやかましいんだろう」

「そうよ、うるさいの。と言うより可愛いくってたまらないんでしょ……あたしってものが」

「とにかく、ぼくを必要以上に警戒していることは事実だな」

「今に先生に口説かれちゃうと思ってるらしいの、パパは」

——神門を出ると、さすがに夕暮れてきた。今日だけでも大分散り落ちた銀杏だが、散り足りないのか、駐車している車の屋根にもまだバラバラ散っている。

千勢子がわが家に帰ったのは、軒端の暗くなる頃だった。国電の中野駅から、十二、三分歩かなければならない。

父の竜五の機嫌はあまりよくなかった。千勢子の帰りのおそいのは、どこか回り道をしたにちがいないが、真っ正面から訊けば、返事をはぐらかすにきまっている。然し恐らくは旗野と二人で、デイトしていたのだろう……。

竜五が言った。

「また、モモ切りが出没しているらしいぜ。夕方の国電が、一番危険なんじゃないか」

「どうして、そんな記事ばかり目にはいるの」

「齡頃の娘を持つ親は、どうしたって、神経質になるンヤ」
「それはママの領分よ。うちではそれを、パパが言うから、いやらしいのよ」

「ところがママは、新聞を三日も四日もためておく——止むを得ず、私が注意するのや」

すると食卓へ食器を並べている母が、

「ミニ・スカートの子を狙うンでしょう」

「とは限らない。着物でも、ジレットの刃一枚で、みごとに何枚も斬るそうだ」

「もう、そんな話、やめてよ」

と、千勢子が悲鳴をあげた。

——食事になった。台所はすべて母の受持ちである。千勢子はいつもお客さまで、ついぞ手伝ったことがない。自分でもそれに気がひけて、料理学校へ通い出したのだが、学校で作った通りに、うちでやってみたことは一度もない。今夜はまぐろの刺身に、アサリのぬた、吸物はさわに椀。

あとは鳥のすりみの竜田あげがくるらしい。

「あたし、生れてはじめて、靖国神社へお詣りしたの」
「おどろいたこともあるものだ。雨が降るぜ。誰と行ったンヤ」

「教室のお友達とよ。その人のお父さんが英霊なんですって……銀杏がとてますばらしかったわ」

「私はまた、デパートをほっつき歩いているンだろうと思っていた」

「パパの嘘つき——ほんとに旗野先生とデイトでもしているンじゃないか、と想像していたンでしょう」

「だって、顔に書いたるも」

「先生も、まさか、そんなことはなさるまい。身分のあることだし、不良学生のように、学校帰りの千勢子を引っぱり出すなんてことは……私はもう少し、あの先生を信用しているのや——」

「これが、靖国神社へお詣りに行ってきた証拠よ」

と、彼女は帯の間から、さっき買ってきたキンランの肌守りを出して、竜五の刺身皿の横においた。

やがて食事がすむと、竜五はさきに応接間へ立って行き、背中を見せたまま、千勢子を呼んだ。

千勢子は食卓を片付けていたが、母のつゆ子に、

「ここはいいから、いってらっしゃい」

と、促されて、悪いけれど、あと始末は母にまかせ、竜五の背ろから、蹤いて行った。

ボスッと、ガスのつく音がした。

応接間は十畳ほどで、白い革の肘掛イスがセットになっている。竜五はその一つに掛けて、千勢子には、左側のイスを指さした。

「こっちでいいわ」

千勢子は向い側の席を占めた。竜五はまた立ち上り、ガラスのケースから、葉巻を一本とって、シガー・カッターで切った。

「今日のことこだわって言うンじゃアないのだが、旗野

進二郎先生との交際は、いい加減のところ、ストップということにしてもらえんか」

いつにない率直さで、彼は言った。

「先生って、パパが考えているような不良じゃないの」

「不良なんてことは言ってもやせん。私も先生を尊敬している。詩壇の第一人者のクラスには入ってられないが、あの人の西行伝や実朝論は、愛読もし、敬服もしているンや。千勢子の拙い詩稿を、読んで下すって、丁寧に批評していただいたことも、忘れはせん。しかし、それはそれ、これはこれだ。私は過去にそういう例を知っているが、師弟愛が変じて恋愛になることは、よくある」

室内には、葉巻が匂いだした。

「それも将来ある青年詩人で、お前に情熱を傾けてきたというなら、当今のことや、私も野暮は言わん。光哉の前例もあるから、家族間の妥協も、十分考慮せんならん——だが、先生とお前とでは、あまりに齢が違いすぎる。お前だって、それを思わんことはなかる」

「そりゃアわかってますよ。それにまだ、光兄さんの例にあてはめるのは、早すぎるわ。光兄さんは大喧嘩して、パパを終生の敵にするって呶鳴って出て行ったンですもの……あたしはまだ、パパにもママにも、うしろめたい気持ちなんて、針ほどもないわ」

光哉は千勢子より、三つ齡上の兄である。子供のときか

ら、竜五とはソリが合わなかったが、結婚問題で激突して、家を飛び出してから、もう二年近くなるのだ。

竜五が言った。

「光哉とお前とが、同じ兄妹とはいえん程違つとることも、よう知つとる。しかし光哉に背かれた私は、千勢子だけが味方なのだ、それをまた今、お前まで先生にさらわれては、一体私というものはどうなるんや……」

竜五は両膝に手をおき、千勢子に向つて、心持ち首を下げるようにした。

「いやよ、パパ——真実の子に対して、敵も味方もないではありませんか」

「しかし、お前も知つてゐるように、私が光哉から受けた傷は深いのだ、それを千勢子の愛によつて、僅かにも医してゐる」

「光兄さんは後悔してゐるわよ、きつと」

「何、わかるもんか——それにしても、千勢子は先生のどの部分に魅力を感じるんや」

「部分じゃないわ、全体よ」

「全体か……」

竜五は唸るように言い返した。もし千勢子が旗野を世にも親切な男と見、そこに惹かれたと答えたなら、それはまさかしの親切で、男が女を手に入れるには、あの程度の親切の安売りはザラであり、それをまともに受けることはあり

はしない、と一蹴するつもりだった。

次に彼の詩業や伝記の著述が、千勢子の心を捉えたというならば、日本にはもっと卓越した詩人がいる。西行や実朝に就いても、より優れた評論が沢山あることを知らないからだと撃破する予定であった。

さらに、千勢子が旗野の面貌に惹かれるといつたら、竜五はすでに老化現象のあらわれている旗野の顔について、いくつかの難点を指摘して、笑殺してしまおうと思つた。

しかし、全体が好きだといわれては返す言葉がない。が、それにしても困つたことになつたものである。

「先生の全体に魅力があるということは、なるほどご名答だが、千勢子に自重してもらいたいのはそこや。この際、お前が先生の胸に飛び込んで行くことは、古宮家にとつて最大の不幸やし、また、二つには、先生をスポイルすることやないか——いいかね。四十も齡の違う女との浮名は、先生にとつては決してプラスではあらへん。つまり、先生を奈落へ引つ張り込むことや。私はそれを案じる。先生にはもっと勉強して戴きたい。詩壇の一線級に進出して、あの人が内に持つていて、まだ生かしきつていない詩魂を發揮してもらいたいんや」

「ではどうしたらいいの」

「先生に近寄るな、傍へいくな、話もするな、原稿も見てもらうな、先生のことはスッパリ忘れるんや」